セラミック九州

佐賀県立九州陶磁文化館報

No.15

編集　1987・3・31
発行　佐賀県立九州陶磁文化館
代表者　久間　三郎
〒844 佐賀県西松浦郡有田町中部字田ノ平乙3100－1
電話 09554－3－3681
印刷所　山口印刷株式会社
佐賀県伊万里市二里町甲2476－21

染付梅樹文壺（そめつけばいじゅもんつぼ）

館蔵資料
佐賀・鍋島藩窯
口径18.2cm　高さ43.3cm
高台径19.3cm

やや撫肩の器形に、地に根をはった梅の幹を裾から上方に力強く描き、枝を左右に伸ばし、梅花があざやかに開いている。梅樹は写実性を残しながらも器面に合せて枝をばわせ、多分に計算された構図といえる。鍋島藩窯様式の中でも、この様な作例は少ない。高台は丸く削り込まれ、布目を残し、また口縁は無釉で、もとは共蓋を伴っていたと思われる。

全国植樹祭記念展

肥前陶磁の名品 ―樹木草花の文様を見る―

主催　佐賀県教育委員会、佐賀県立九州陶磁文化館
会場　佐賀県立九州陶磁文化館　展示室（1～3）
会期　昭和62年5月23日（土）～6月28日（日）
　　休館日　6月1、8、15、22日
観覧料　大人　500円（400円）
　　大学生　250円（150円）
　　小、中、高校生は無料。
　　（　）内は団体、20名以上。

肥前佐賀の地は、唐津焼、伊万里焼など陶磁器の生産が盛んであった。室町末期ごろから焼かれはじめた唐津焼は、文禄・慶長の役を契機として、またわび茶の隆盛にともない大きな進展をみせ、数多くの茶陶を生みだした。また江戸初期、有田の地では日本で初めて磁器が焼かれたといわれ、国内外の市場の拡大にともない急速に量産化、多様化をなしとげ、伊万里（初期伊万里・古伊万里）柿右衛門の様式を生みだし、また藩直轄の窯としての鍋島藩窯が形成され鍋島様式が生みだされた。

これらの陶磁器に施された文様に目を向けると草花や樹木など植物文様がひとつの大きな主題となっている。唐津焼においては絵唐津が生まれ、志野・織部にみられるような、松や竹など植物文様が多く描かれた。また伊万里・柿右衛門・鍋島においても、桜、菊、梅、牡丹など多彩な文様が染付や色絵で描かれた。

本展では、この誇り高き肥前佐賀の陶磁器の名品の数々を、樹木草花の文様を通じて展観し、広く江湖の清鑑に供するものである。

絵唐津萩文壺
唐津・甕屋の谷窯　16世紀末―17世紀前半
口径12.0cm　高さ14.5cm　底径7.5cm
九州陶磁文化館

絵の描かれた唐津焼を一般に絵唐津とよぶが、この壺も秋の草である萩が軽いタッチで描かれている。肩がはり、胴から裾へゆるやかに締る。底部は浅く凹状に削り込まれている。しっとりと落ち着いた趣きのある作行きである。

▼

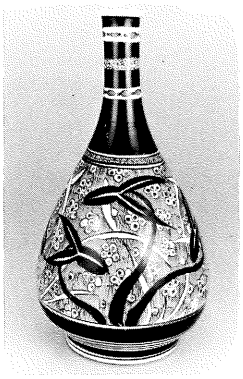
絵唐津菖蒲文鉢
唐津・市ノ瀬高麗神窯　16世紀末―17世紀初
口径16.1cm　高さ11.3cm　高台径7.6cm
サントリー美術館

胴の外側面表裏に鉄砂で菖蒲を描いている。唐津焼においては志野・美濃にみられるほど豊かな表現力を持たなかったが、それでも素朴な中にもある種の迫力を感じさせてくれる。高台は小さめで裾広がりになり、腰に少し段をつけ、口縁はやや端反りとなる。

▼

色絵梅花沢瀉文瓶
伊万里　17世紀後半
口径3.6cm　高さ27.6cm　高台径10.0cm
九州陶磁文化館

細長い首に下にふくれた胴を持つ徳利状の瓶。胴には大きく沢瀉文を描き、背景は赤の斜線と梅鉢で埋める。この手はかつては古九谷に分類されていたが、類似の意匠文様の水注が英国で紹介され、輸出品であっ



たことから、有田製であると考えられるようになった。

◀

色絵菊牡丹文角瓶

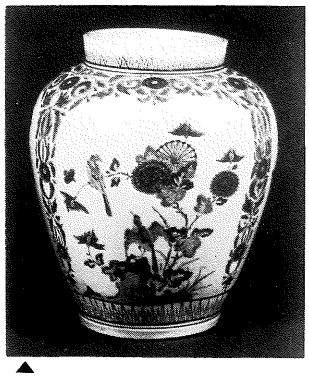
伊万里・柿右衛門様式　　17世紀後半

胴径12.8cm　高さ29.0cm　高台径11.0cm

九州陶磁文化館

胴の四方にそれぞれ菊、牡丹、萩、紅葉と季節の異なる草花を上絵付で描き、見る人を楽しませてくれる。上絵付の発色もよく、空間を生かした構図、巧妙な筆づかいは柿右衛門様式の完成期をしのばせる角瓶である。

▼



▲

色絵三方割梅菊牡丹鳥文壺

伊万里・柿右衛門様式　　17世紀後半

胴径21.3cm　高さ25.0cm

菊は古来中国では不老不死のシンボルとされ、日本でも長く信じられてきた。江戸時代以降、その意味は薄れ、むしろ日本の花の代表に数えられるに至った。三方に窓をもうけ、各々に梅、菊、牡丹に二羽の鳥を配する意匠構成は、柿右衛門様式によく見られる仕方である。

染付松文三脚付皿

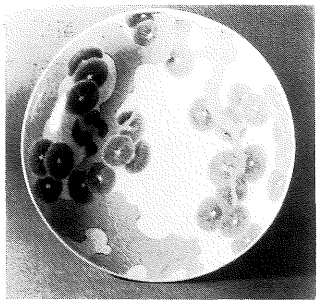
鍋島　　17世紀後半―18世紀初

口径29.6cm　高さ7.5cm

サントリー美術館

鍋島藩窯様式の染付皿。松の幹が皿の周縁部にそって力強く伸び、垂れ下がる枝に車輪状の松葉を描く。松は日本でも古くから、めでたいものとされ、神聖視された。この松文皿も、そのような松を巧妙な意匠力で表現し、幻想的な気分を抱かせる作に仕上げている。

▼



青磁陽刻唐花唐草文水指

鍋島　　17―18世紀

口径13.8cm　高18.3cm　高台径11.7cm

九州陶磁文化館

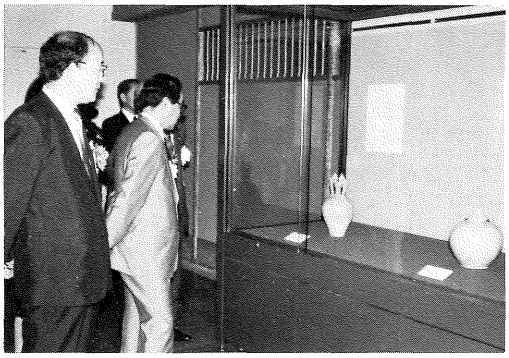
鍋島藩の御用窯である大川内山では、精巧な色絵磁器とともに、優美な青磁の製品も生み出した。この水指もその一つで、胴には唐花と蔓状の唐草文が陽刻されており、高雅な気品を漂わせている。いわゆる蜜柑形の器形で、口部は無釉にし、当初は共蓋を伴っていたと思われる。

▼

「白磁の美」展

昭和62年度の特別企画展「白磁の美」は、昨年の11月19日に無事終了しました。会期中には、12,846人の入館者がありました。11月3日には、京都の陶芸家宮永理吉先生に「白磁の美」についてご講演いただき、自作の出品作品に関する制作ビデオを見ながら、白磁の魅力と日本の白磁の特質について語っていただきました。「日本の場合、白磁の美しさに気づいたのは戦後といっても過言ではない」という宮永先生の指摘は、聴衆にとっては刺激的で新鮮な見解であったようです。日本の白磁の研究も鑑賞も造形的な追求も、永い陶磁の歴史においては、まだその端緒にあるのかもしれません。

「白磁の美」展開催に際して、白磁作品をいくつか所蔵家の方々から寄贈いただきました。特にその中でも記念すべきものとして、樋渡陶六先生の白磁観世音像があります。常設展ではいつも白磁壺をご出品いただいておりましたが、当展にはこの観世音像を出品され、会期中にご寄贈の申し込みがありました。先生をはじめ所蔵家の方々にお礼を申し上げます。



第5回　西松浦郡小中学校 児童・生徒作品展

第5回西松浦郡小中学校児童・生徒作品展が開催されました。毎年恒例の展覧会ですが、今年は昭和62年2月1日（日）から2月15日（日）までの13日間（月曜日は休館)。以前に比べて一週間長く期間が延長されました。好評なためです。西松浦郡には小中学校が有田小学校・有田中部小学校・曲川小学校・大山小学校有田中学校・西有田中学校の6校あります。窯業の中心地だけに、どの学校にも陶芸教育のための窯やアトリエが備えられています。とくに小学校低学年の児童の作品群は、ピカソも顔負けと思われる程に、何ものにもとらわれず、自由でのびやかで、躍動感にみちており、小品ながらも迫力があって、見る人々をうならせていました。陶芸作品だけでなく、絵画、紙工作、木彫、銅版レリーフなどもあわせて243点が陳列されました。またその中には特別展示として、通学途中、事故で亡くなった有田中学校1年館林未幸さんのデザイン画も展示されて、同窓生の涙をさそったことでした。

なお会期中には2,894人の入館者がありました。

第９期・第10期
陶芸教室だより

第９期陶芸教室は、昭和61年６月21日にはじまり、毎週土曜日の午後２時から５時までの10回開かれ、８月23日に終了しました。講師は佐賀県立有田工業学校の大宅利秋先生。

第10期陶芸教室は、８月30日から11月１日までの10回、講師は同校の石橋国男先生でした。

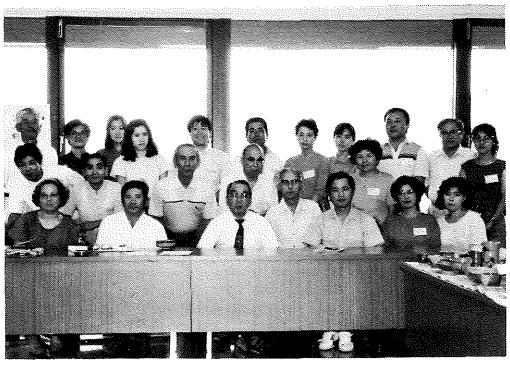
受講者がみずからの手で土をこね、形をつくり、釉を調合して施釉し、窯に入れて焼きあげるまでを体験することによって、やきものを作るよろこびを味わっていただきました。

第10期卒業生の森脇洋子さんは『三十二のひとみ』と題して次のような感想を述べておられます。

「老若男女一生懸命掃除をしています。ここは有田の陶磁文化館の陶芸教室です。８月30日に10期生として入校し、はや３カ月たちました。ピカピカの教室もその間に泥だらけ。ロクロ、板作りと、有田工業高校の石橋先生のご指導でどうにか作品を作ることができました。自分の作品をテーブルの上に並べ、いよいよ閉講式です。１つの物を作り上げた満足感でしょうか、皆さんとても輝いて見えます。久間館長から終了証書を受け取るときの16人の笑顔の中に、何ともいえない心地よさを感じたのは私だけだったでしょうか。次回はあなたの出番です。芸術家気分を味わってみてはいかが」

現在、卒業生の皆さんはＯＢ会会員として、土曜日、日曜日の午前９時から午後５時まで当館のアトリエで自主的に作陶活動を楽しんでおられます。

大宅利秋・石橋国男両先生には厚くお礼申しあげます。



第９期のみなさん

第９期の反省会

第10期のみなさん

第10期の反省会

終了証書を受ける森脇さん

〈速　報〉

有田町小溝上窯跡の調査

小溝上窯の発掘は昭和61年度国庫補助事業「肥前地区古窯跡詳細分布調査」として、当館が去12月に実施した。小溝窯址群は上・中・下の３ケ所の窯跡から成るが、この窯場については『皿山代官旧記覚書』安永２年（1773）に家永壱岐守が「有田郷小溝原」に住んで焼き、その後現在の土場を発見し、白川山の天狗谷に窯を一登り築き磁器を焼いた、とある。また金ケ江文書文化４年（1807）には先祖の唐人参平（金ケ江三兵衛）は有田郷乱橋（現、三代橋）に居て、それから現在の泉山に陶石を発見し、最初は白川天狗谷に窯を築いたとある。この三代橋は現在では小溝に隣接した地名であるが、当時は広義の小溝原の中に入っていた可能性が強い。佐世保市の今村文書元禄６年（1693）に「小溝山頭三兵衛」とあるのは、金ケ江三兵衛のことではないかと推測されている。このように肥前磁器草創期の窯としては異例なほど記録が残る小溝窯であるが、従来考古学的調査は行なわれていなかった。

調査は窯全体が遺存する可能性のある部分と物原の２ケ所にトレンチを設けた。発掘の結果、重複関係にある２基の窯の焼成室が発見された。２基の窯は、東側の窯（１号窯）が古く、西側の窯（２号窯）を築く際に、東側の窯を埋立てて、排水用の溝を掘っており、その溝が古い１号窯の奥壁や窯床面を壊している。

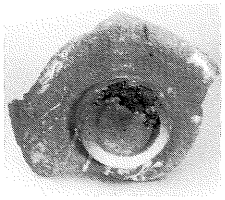
１号窯の焼成室規模は砂床中央付近の幅239cm、砂床の奥行182cmである。床面には陶器の碗４点と皿１点が残されていた。皿は砂目積によって窯詰めされたものである。この１号窯を埋立て、２号窯を築いている。２号窯は１号窯の床面より約30cm高いレベルに床面を設けているが、保存状態は極めて悪い。わずかに残存した砂床部分から染付の碗と皿が出土した。

物原は１・２号窯の西側にある。物原の調査によると、出土品の大半は１・２号窯の製品とみられる陶器と磁器であったが、最下層部からは１・２号窯の調査部分では出土しなかった胎土目積による唐津陶器ばかりがみられた。このことから小溝上窯は１・２号窯の前に胎土目積の唐津陶器のみを焼造した窯があり、１・２号窯の段階で砂目積の唐津陶器と磁器を焼いたものとみられる。

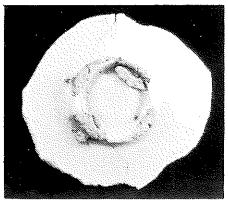
小溝上窯は胎土目積陶器の段階（1580年～1609年と推測）に始まり、17世紀に入ると砂目積陶器と磁器を焼造し、寛永14年（1637）の窯場の整理・統合事件で廃窯になったものと推測される。記録上、有田の窯業の黎明期に名を残す金ケ江三兵衛や家永壱岐守らとのつながりも推測される小溝山の一つであるので、今後この窯跡の保存活用を推進することが望まれる。

（大橋康二）

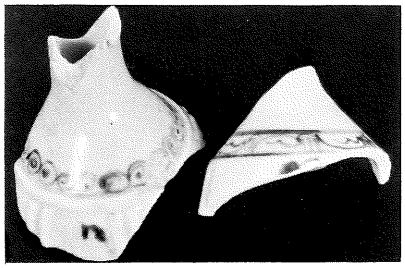
１．１号・２号窯焼成室
奥が１号窯、手前が２号窯



２．鉄絵陶器大皿
物原地山直上出土、底径10.9cm



３．染付皿（砂目積）
２号窯Ⅱ層出土、底径4.6cm



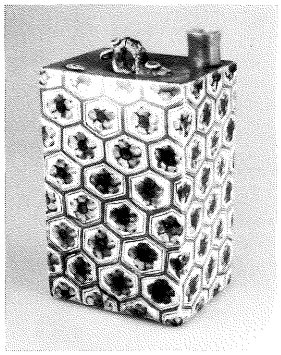
４．染付鎬手瓶
物原、左はⅠ層、右はⅡ層出土、左残存高９cm

シリーズ
やきものにみる文様 (13)
亀甲文様

六角形は自然の形状のひとつとして目にとまる。蜂の巣の単位、亀の甲羅の単位、雪の結晶の基本的な形などである。亀甲文様の名は亀の甲羅に似るところから名づけられているが、その文様の起源が亀の甲羅に由来するかどうかはわからない。エジプト第19王朝ＢＣ.1205年頃のシプタハ王墓の天井画「魂を迎える二女神」や、第19王朝のセンネジェムの墓あるいは第19―20王朝のイリネフェルの墓の壁面画「ミイラとアヌビス神」には背景に亀甲文様が描かれており、この文様の古さを示している。我が国では古墳時代にはみられ、福岡県鈴ケ山２号墳から出土した大刀の柄頭に亀甲の中に一羽のはばたく鳳凰が象嵌されている例が紹介されている。飛鳥・奈良時代には法隆寺献納宝物の蜀江錦などの染織品に、平安以降には平家納経や伝藤原行成筆の粘葉本和漢朗詠集の料紙にも用いられている。

やきものでは古清水の重箱や香炉、壺、織部の皿、仁清の色絵釘隠などにまた有田や九谷の装飾文様として江戸時代の作品に広く見られる。ここに紹介する作品は白磁胎に色絵を施した角徳利。17世紀後半の有田皿山の製品である。磁土の平板を寄せ合わせて成形する。底は平たく無釉で布目の跡がみえる。胴の四面には赤の太い線と細い線で亀甲文様をあらわし、六角形の中には黒でふちどった五弁花文様を緑で彩色する。赤と緑が補色の関係で色あざやかな印象を与える作品である。いくつもつながった六角形の亀甲文様を亀甲繋ぎと呼ぶこともある。本図のように六角の中に花文や花菱文など他の文様をまじえた例が多い。

（吉永陽三）



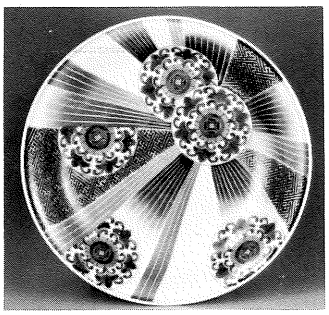
色絵亀甲花詰文角瓶

伊万里　17世紀後半

館蔵

シリーズ
やきものの技法 (13)
墨弾き

墨を用いて白抜きの文様を描く技法。通常磁器染付の藍地に白線の文様を施す場合に用いる。制作の工程は、素地に墨で文様を描き、その上から全面に呉須で着色すると、墨は膠質を含むため吸水性がなく呉須を弾く。これに施釉して本焼きすると、墨は高温で焼け抜け、墨で描いた文様が白い文様となる。墨によって呉須の藍色の着彩を防ぐため、墨の部分は結果的に白磁の白さを見せることとなる。なお施釉時に墨が釉薬まで弾いてしまう場合があり、施釉前に素焼きぐらいの温度で窯入れし、墨を焼き抜いておくと施釉が完全となる。鍋島藩窯の製品によく見られる墨弾きの技法は、上記のように墨を焼き抜いたあとの施釉とされる。こうした高級品以外の大量生産品でも墨弾きの技法は用いられており、廉価品においては、施釉前の墨の焼き抜きを行うことなく施釉されたと考えられる。



染付菊唐草文皿

鍋島藩窯　18世紀

館蔵

墨弾きの起源については、肥前磁器の場合は1650年代から1660年代に出現するが、それが中国磁器の影響によるものかどうかは、明らかではない。18世紀の清朝の染付磁器に墨弾きと思えるものがあるが、数は少なく、技法として多様され表現として完成度が高いのは肥前の磁器においてである。古窯跡出土陶片で初期の墨弾き資料としては、「大明成化年製」の文字を見込に表わした天狗谷窯出土の皿等がある。こうした墨弾きの始まる以前は、白抜き文様を施す場合は白く塗り残すか、呉須で面塗り（濃み）したあと釘等で線彫りして呉須を掻き落す技法が用いられた。

写真の皿は放射文と紗綾形文は墨弾きによる白抜き文である。濃みの濃淡と白抜き文の組み合せにより、藍一色で密度の高い表現がなされている。(鈴田由紀夫)

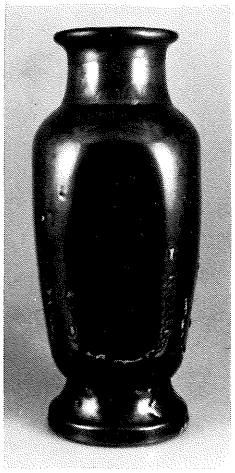
陶磁資料寄贈者芳名
（敬称略）

〔昭和61年４月１日～62年３月31日〕

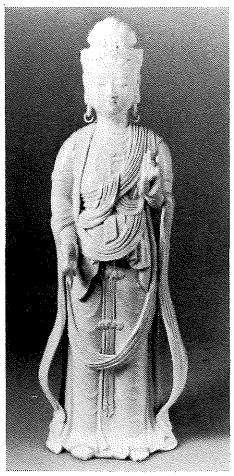
九州陶磁文化館に資料をご寄贈いただきましてありがとうございました。ご寄贈いただきました資料は、永く保存すると共に、研究・展示に供したいと存じます。今後とも、ご協力をお願い申し上げます。

またご寄贈いただきました資料は、新収蔵品展（62.9.1～9.13）に展示し、広く県民の皆様にご高覧いただく予定です。

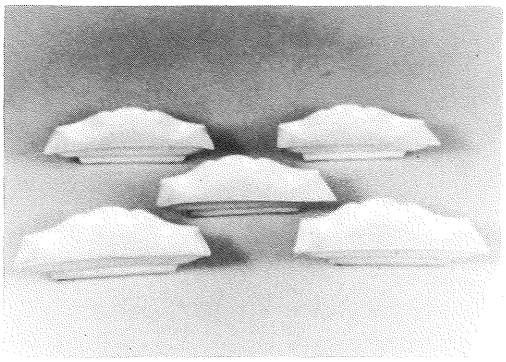
江口　茂　神奈川県　白磁雪輪形向付
小橋一朗　埼玉県　白磁富士山形皿
三菱鉱業セメント(株)福岡支店　福岡県　染付唐草幾何文角形タイル
笹倉一男　福岡県　白磁陽刻竹虎文鉢
山崎隆生　福岡県　金錆山水文花瓶、褐釉四耳付葉茶壺
樋渡陶六　佐賀県　白磁宝珠観世音像
福島晴人　佐賀県　銅版染付鳳凰文皿、釉下彩「白花」銘酒樽、褐釉湯たんぽ
森山　功　佐賀県　木葉天目茶碗
久保田嘉元　佐賀県　唐津甕、唐津大瓶、唐津雲助徳利



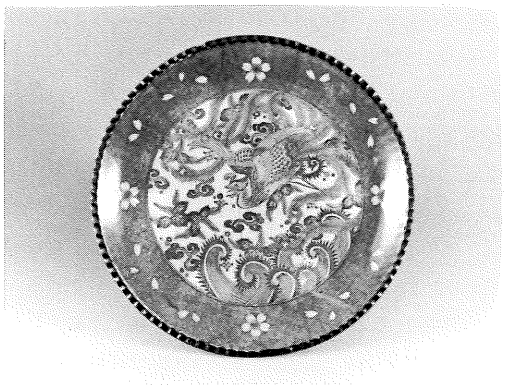
金錆山水文花瓶　須恵
明治22年　山崎氏贈



白磁宝珠観世音像
樋渡陶六作　昭和60年
樋渡氏贈



白磁富士山形皿
伊万里　江戸前期(17世紀後半)　小橋氏贈



銅版染付鳳凰文皿
有田　明治～大正(20世紀前半)　福島氏贈

木葉天目茶碗　森山功作　昭和61年　森山氏贈

利　用　案　内

開　館　午前９時～午後４時30分　月曜休館　年末年始休館　12月28日～１月４日
観覧料　一般150円（100円）／大学・高校生100円（70円）／中・小学生50円（30円）／（ ）内は20人以上の団体料金。但し、特別企画展の場合は、その都度別に定めます。
交　通　佐世保線有田駅下車徒歩15分